

2020. 11. 1 (日) マタイ23:23~24

**23:23** わざわいだ、偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちはミント、イノンド、クミンの十分の一を納めているが、律法の中ではるかに重要なもの、正義とあわれみと誠実をおろそかにしている。十分の一もおろそかにしてはいけないが、これこそしなければならないことだ。

**23:24** 目の見えない案内人たち。ブヨはこして除くのに、らくだは飲み込んでいます。

<説教>

「盲人を案内する盲人」、「目の見えない案内人たち」である「偽善の律法学者、パリサイ人たち」の愚かさを、イエスは彼らの「誓い」についての教えをあげて指摘なさいました(23:16-22)。

更にイエスは彼ら「目の見えない案内人」の「十分の一」の献げ物の有り様をあげて彼らの愚かさを指摘なさいます。

イエスは彼らが行っている「十分の一」の献げ物の背後に潜む彼らの暗い精神を明らかになさいます。

と同時に「十分の一」の献げ物の正しい姿勢についてもお教えになるのです。

**23:23** わざわいだ、偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちはミント、イノンド、クミンの十分の一を納めているが、律法の中ではるかに重要なもの、正義とあわれみと誠実をおろそかにしている。十分の一もおろそかにしてはいけないが、これこそしなければならないことだ。

当時、律法学者やパリサイ人は「十分の一」の献げ物を一確かにと言うか、一応と言うか、とにかく一きちんと献げていました。

ここで「十分の一」の献げ物についての“歴史”をざっと省みると…。

聖書に記されている最初の「十分の一」の献げ物は、アブラハムが「いと高き神の祭司」メルキゼデクに「すべての物の十分の一を」与えた(創世記14:20)ことです。

それは闘いに勝利したアブラハムの、アブラハムを勝たせ祝福して下さった神に対する感謝と喜びの告白でした。

また、アブラハムの孫であるヤコブが兄エサウから逃れて伯父(おじ)ラバンの所に向かった旅の途中、神がヤコブにご自身を現して守りと助けを約束して下さったとき、彼は神を知った感謝と喜びのゆえに「私は、すべてあなたが私に下さる物の十分の一を必ずあなたに献げます。」(創世記28:22)と誓いました。

さらにモーセの時代になって、神の恵みによってエジプトの奴隷から解放されたイスラエルの人々が神の民として感謝と喜びをもって守るべき律法として明文化されました。

「地の十分の一は、地の産物であれ木の実であれ、すべて主のものである。それは主の聖なるものである。」(レビ27:30)

「あなたは毎年、種を蒔いて畑から得るすべての収穫の十分の一を、必ず献げなければならない。…あなたが、いつまでも、あなたの神、主を恐れることを学ぶためである。」

(申命記 14:22,23) 等々

そうやって恵み深い神への信仰、感謝と喜びの告白として神の民イスラエルは自分たちの収入の「十分の一」の献げ物をするようになりました。

その後、人々が信仰を失い墮落しても、彼らが罪を悔い改め、恵み深い神に感謝と喜びをもって従おうと立ち返るたびに「十分の一」を献げることにも復活したのです。

Ⅱ歴代誌 31 章にはヒゼキヤ王によるそのような宗教改革の事が記されています。

さらにその後、イスラエルの民は自分たちの不信仰のゆえに、北イスラエル王国はアッシリヤ捕囚、南ユダ王国はバビロン捕囚という神のさばきに服します。

しかしその後、国が再建されると人々は再び神の前で神の律法を守り、「十分の一」の献げ物も誓ったのでした。(ネヘミヤ 10 章)

それでもまたすぐに民の信仰は墮落し、それと同時に「十分の一」を献げなくなりました。

神は旧約最後の預言者マラキを通して「わたしに帰れ。」と呼びかけ (3:7)、イスラエルのすべての民が「十分の一と奉納物において」神のものを盗んでおり、「甚だしくのろわれている」と告発なさり (3:8,9)、「十分の一をことごとく、宝物倉に携えて来て、わたしの家の食物とせよ。こうしてわたしを試してみよ。一万軍の主は言われる一わたしがあなたがたのために天の窓を開き、あふれるばかりの祝福をあなたがたに注ぐかどうか。」(3:10)と呼びかけられたのです。

このような歴史を経て、イエスの時代には「十分の一」の献げ物や「安息日」の律法を厳格に解釈し守ろうという律法学者やパリサイ人がいて、人々を教えていたのです。

彼らは「地の十分の一は、地の産物であれ木の実であれ、すべて主のものである。それは主の聖なるものである。」(レビ 27:30)を厳格にそして拡大解釈して、「ミント、イノンド、クミン」というハーブ(香辛料)の類いまでも「十分の一」の献げ物と定め「納めて」いたのです。

そんな彼らに対してイエスは「わざわいだ」と嘆かれました。

なぜなら、そこまで厳密、厳格、正確、熱心に「十分の一を納めてい」ながら同時に「律法の中ではるかに重要なもの、正義とあわれみと誠実をおろそかにしている」からだ、とイエスは言うのです。

「律法の中ではるかに重要なもの」という言葉から思い起こすのは、「律法の中でどの戒めが一番重要ですか」(22:36)という問いです。

イエスの答えは『あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。』これが、重要な第一の戒めです。『あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい』という第二の戒めも、それと同じように重要です。」(22:37-39)でした。

それで、「正義とあわれみと誠実をおろそかにしている」とはこの「重要な」神への愛と隣人への愛という、どちらも神から出た一番大事な命令を「おろそかにしている」ということでしょう。

それはつまり、律法学者・パリサイ人の「十分の一」の献げ物についての厳格、熱心等は神から出たものではないということです。

彼らの厳格、熱心等は神からではなく、彼ら自身の「心から出て来る」(マタイ 15:19)ものだとイエスは指摘なさったのです。

マタイの福音書に記されていることと同じことが記されているルカの福音書(11:42)では「正義と神への愛をおろそかにしている。」と書かれています。

彼らの心の思いは神の義と愛、あわれみ、恵みに感謝して、喜んで神にお捧げするものではありませんでした。

彼らの心の思いは神でなく、自分たちに向いていたのです。

彼らの「十分の一」の献げ物の厳格さ・熱心さは、自分たちの義、正しさ、立派さ、信仰深さを人間（自分自身と他人）に見せつけ、誇り、自慢する心から出ていたのです。

「正義」とここで訳されている言葉は他の箇所ではほとんど「さばき」と訳されていません。

ここで「正義」と訳されたことと合わせれば、「正しいさばき」と言っていいいでしょう。

本当に「正しいさばき」は神のもの、神から来るのです。

「神よ。私がほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦淫する者でないこと、あるいは、この取税人のようでないことを感謝します。私は週に二度断食し、自分が得ているすべてのものから、十分の一を献げております。」こんな祈りをしたパリサイ人は神から義と認められなかったというたとえをイエスはお話しになりました。(ルカ 18:9-14)

このようにパリサイ人や律法学者は「自分は正しいと確信していて、ほかの人を見下して」いました。

自分で自分は正しいと判決し、しかもほかの人は罪人と判決していた、つまり悪い、誤った「さばき」を行っていたわけです。

神の御前での、神の目に見える自分の罪深さなど考えもしませんでした。

しかし、それでは「偽善」だ、「わざわいだ」とイエスは言われるのです。

そしてそうではなくむしろ、「神様、罪人の私をあわれんでください。」(ルカ 18:13)と神の前にへりくだり、罪を悔い改めて、そんな罪深い自分に対してイエス・キリストを通して注がれている神の「正しいさばき」に、限りない「あわれみ（真実の愛）と誠実」に信頼して（信仰をもって）、神への感謝と喜びを告白して自分自身をお捧げすること、「これこそしなければならぬことだ」とイエスは言われるのです。

「あなたがたのからだを、神に喜ばれる、聖なる生きたささげ物として献げなさい。それこそ、あなたがたにふさわしい礼拝です。」(ローマ 12:1) と使徒パウロが言うのもそのことです。

神へのそういう信仰告白と感謝と喜びをもったうえで、しかし、ならばこそ、ゆめゆめ「十分の一もおろそかにしてはいけない」とイエスは言われるのです。

しかしイエスの言われることが分からず、「何が良いことなのか、主があなたに何を求めておられるのか」(ミカ 6:8)、心が暗くい見えない案内人たち、律法学者、パリサイ人にイエスは言われます。

**23:24 目の見えない案内人たち。ブヨはこして除くのに、らくだは飲み込んでいる。**

「ブヨ」は葡萄酒に集（たか）る小さな虫のことで、人々は布で濾過（ろか）して除いて飲んでいました。

またそういう虫は律法でも「忌むべきもの」とされていました(レビ 11:20,23)。

また「らくだ」も「汚れたもの」とされていました（レビ 11:4）

それで「ブヨはこして除く」ようにそこまで厳密に細かく注意を払っていながら、平気で「らくだは飲み込んでいる」というのは、まるで漫画のようなおかしさであり、おかしさを乗り越して「愚か」なことと言うほかありません。

それと同じように、「ミント、イノンド、クミンの十分の一を納めている」のに「律法の中ではるかに重要なもの、正義とあわれみと誠実をおろそかにしている」、律法学者やパリサイ人の「愚か」さ、いや罪をイエスは指摘したのです。